

で逆に相手の本質をとらえることができただけではないだろうか。また、言葉の壁はあっても、自分の周りには壁をつくらないようにしていた。食堂では日本人同士で話していても、日本語は使わずに英語で会話をするようにしていた。

日本語で話していると、こちらにそのつもりはなくても日本語のわからない人は疎外されているように感じる。実家から日本食が送られてきたときは皆で分けたりし、その際には思い切り日本語を話したが、それ以外ではできるだけ自分から孤立するようなことはしないようにしていた。

自分探しの方向を決めた 卒業論文

周りの人々に支えられながら試行錯誤の日々だったが、そんなACでの生活のなかで私にとって大きな転機となったのは、エクステンデッドエッセイだった。エクステンデッドエッセイは卒業論文であり、学生は自分でテーマを決めて、研究を行い、論文を仕上げなければならぬ。私は生物学でエクステンデッドエッセイ

を書きことに決めた。テーマは、当時母が手作りしていた味噌が熟成の度合いで味が異なることに興味を持っていたので、味の違いはアミノ酸組成の違いによるものなのか、また、その味の違いは異なる食文化間でも認識できるのかについて調べることにした。

夏休み中に実験を行い、卒業論文を書き上げ、研究結果を先生方や他の学生の前で発表する機会を得たが、同じ実験結果でも人によって解釈が異なるおもしろさを体験した。実験は元々好きだったが、自分でテーマを決め、実験手法を検討したのはこれが初めてだった。完璧とはほど遠い出来だったが、自分なりに手ごたえを感じることができたし、ACにいい間に模索していた「自分らしさとは何だろうか、自分は何をしたらいいのだろうか」という不安に少し道筋が見えたように思えた。

ACを卒業してからは生物学を専攻し、マラリア原虫のエネルギー代謝の研究で修士、博士号を取得した。その後、実験室から少し離れてみたくて、難民の精神保健の分野で働いたのちに国際保健学修

士をとり、二〇〇八年から現在の職についている。

現在の仕事は、実験という大学の博士課程での経験をフィールドという現場で活かせるもので、私にとっては点であったものが線につながったような思いである。そんな時期に自分の原点であるAC留学について体験記を書かせていただけることになったのも、何かの縁のような気がしてならない。現在私が自分の好きな仕事にたどり着けたのも、AC留学中の自分探しの葛藤のなかから生まれた自信や、異文化で採られたことで培われた柔軟性があったからこそと思う。

世界は広いんだ、という思いと、それを素直に受け入れてもがくことができる場所と時間を、若いときに与えられたのは本当に贅沢なことである。そんな機会を与えてくださった、日本経団連に心より感謝したい。そして、より多くの日本の若者たちにそんなチャンスが与えられることを願ってやまない。そこで得られた経験は必ず大切な宝物となって未来の自分を支えてくれるのだから。

自分探し——アトランティック カレッジ留学を振り返って

ジョンス・ホプキンス大学
公衆衛生大学院疫学部研究員

小林 環

こばやし

たまき



一九九五―一九七年UWCアトランティックカレッジ(A
C)に留学。二〇〇〇年インペリアル・カレッジ・ロ
ンドン生物学科卒業。二〇〇三年東京大学大学院医学系研
究科国際保健学専攻修士課程修了、二〇〇六年同専攻博
士課程修了。二〇〇八年ジョンス・ホプキンス大学公衆
衛生大学院修士課程修了。二〇〇八年よりジョンス・ホ
プキンス大学公衆衛生大学院に勤務。

私は現在、米国・ボルチモアに拠点を
置きながら、ザンビアでのマラリア疫学
調査のプロジェクトに携わっている。仕
事の内容は、フィールドサンプルの実験
解析、現地の実験助手の指導、フィー
ルド調査のサポート、データマネジメン
ト、統計解析と多岐にわたる。大きなプロ
ジェクトなので、一人でできることは限
られており、国籍もバックグラウンドも
異なる、さまざまな人たちとチームを
組んで仕事を行うことが要求される。一二年

前私がアトランティックカレッジ(以下、
AC)に留学して得られた一番の宝物、
それは自分というものを持ちながら異
なる人々とやっけていく術であると思
う。いま、私は自分の仕事を通じて日
々それを実感している。

AC留学を振り返って

英国・ウェールズにあるACへの留
学を志望したのは、英語をきちんと
話せるようになりたかったためと、
ヨーロッパ

●(社)ユナイテッド・ワールド・カレッジ(UWC)日本協会は、世界各国から派遣されてくる生徒たちとの教育体験の共有により、国際感覚豊かな人材を養成するという理念を掲げるUWCの日本委員会として、毎年一〇名前後の高校二年生を世界各地にあるUWC傘下の高校に派遣し、すでに四三四名の卒業生を輩出している。

に行ったことがなかったためという、し
ごく単純な理由だったのだが、実際の現
地での生活は楽ではなかった。言葉はわ
からない、勉強内容は大変、周りの学生
はとにかく優秀という環境のなかで、英
語が話せるようになることや海外での生
活は付属的なことにすぎなかった。

とにかく与えられた課題をこなしてい
かなければならない。そんなACでの生
活のなかで自分に自信をなくしてしま
うこともあった。ささいなことで落ち込
んでしまったり、逆に小さなことで勇気
づけられたりもした。そんなときに私の
つたない英語を聞いてくれ、相談に乗っ
てくれたり、他愛もない話に興じたりし
たルームメイトや友人たちにはいまでも感
謝の思いでいっぱいである。
伝えたいという思いと、理解しようと
してくれる誠意。言葉に不自由したこと